

なぜ、懸命に「祈り」を捧げても通じないのか

ただ、そう述べても、なお、あなたは、

「しかし、深刻な問題や厳しい逆境の中で、『この問題や逆境を越える叡智は、すべて与えられる』という強い心を持つことは難しいのではないか？」

と思われるかもしれない。

しかし、我々の心の奥深くには、実は、我々自身の想像を超えた「強さ」が眠っている。たしかに、日常の平穏な感覚に慣らされた人が、突如、深刻な問題や厳しい逆境に直面して、この覚悟を定めることは、それほど容易ではないだろう。

だが、一方で、人間というものは、ぎりぎりまで追い詰められたとき、不思議なほど、腹が据わることも事実である。そして、腹が据わったとき、やはり不思議なほど、「叡智」が降りてくる、「勇氣」が湧き上がってくることも事実である。

1

1

それゆえ、昔から、この日本という国では、「逆境を前に、開き直る」という言葉が語られ、「人事を尽くして、天命を待つ」という言葉が語られてきたのである。

筆者もまた、第三話で述べたように、医者も見放す大病を患い、死に向き合う不安と恐怖の日々を与えられたが、そのぎりぎりの状況で、「心が開き直る」という体験をした。すなわち、その極限の状況において、不思議なことに、

「ああ、明日死のうが、明後日死のうが、

それが天の定めならば、仕方が無い！

しかし、今日という一日は、決して無駄にしない。

今日という一日を、精一杯に生き切ろう！」

との思いが湧き上がってきたのである。そして、その思いを定めると、これも不思議なほど生命力が湧き上がり、病を超えることができたのである。

そして、病を超えただけではない、さらに、自分の中に眠っていた能力が開花し、「強い運氣」を引き寄せる力が与えられたのである。

では、人生における深刻な問題や厳しい逆境を前に、我々は、どうすれば、こうした覚悟を定めることができるのか。

本書の最後に、そのための一つの技法を伝えておこう。

それは、「祈る」ことである。

しかし、こう述べると、誤解が生まれるかもしれない。

なぜなら、「祈る」と言うと、多くの人は、「願望の祈り」を思い浮かべるからである。「願望の祈り」とは、例えば、「この試験に合格させたまえ」や「この商談を成就させたまえ」といった、自分の願望が実現することを、神や仏、天に求める祈りのことである。

2

実は、人類の歴史始まって以来、無数の人々によって行われてきた「祈り」の多くは、こうした「願望の祈り」であった。

もとより、誰といえども、人生で直面した問題や逆境が、自分の望む形で解決し、乗り越えられることを願うのは自然な人情であり、こうした「願望の祈り」を、筆者は否定するわけではない。

しかし、この「願望の祈り」もまた、必ず、心の中でのプラスの想念とマイナスの想念の分離が起こってしまう。すなわち、心の表面での「試験に合格させたまえ」という祈りの反面、心の奥深くに「こうして祈っても、試験に落ちるのではないか…」というネガティブな想念を生み出してしまうのである。

そして、実は、心の奥深くに生まれる、このネガティブな想念こそが、最も強力な「祈り」になってしまうのである。

こう述べると、また、驚かれるかもしれないが、

2

「祈り」とは、

手を合わせて祈っている間の想念が「祈り」なのではない。

本当は、心の奥深くに常に存在する想念こそが

最も強い「祈り」になってしまっているのである。

残念ながら、まだ、多くの人が、この「祈り」というものの本質を理解していないが、例えば、心の奥深くにある「病気になるのではないか」との恐怖心は、それを日々、持ち続けるならば、まさに極めて強い「祈り」になってしまいがゆえに、結果としてそれが実現し、病気を引き寄せてしまうのである。

このように、「願望の祈り」は、しばしば、心の奥深くに、その逆の想念を生み出してしまい、それが本当の「祈り」になってしまったため、どれほど懸命に祈りを捧げても、その祈りと逆の結果を招いてしまうことが起こるのである。